

## 書評

### 小林美和著『平家物語生成論』

美濃部重克

全体性の回復への志向は現代思潮の一つの特徴と言えるだろう。断片化して、それを実体なるものに照応させてみる。それで

何かが分かったとする考え方は、今や歧路に立っている。いわゆる実証なるものの在り方についての手直しが要求されているのである。実証は部分を全体に有機的に結び付け得るような解釈と手を携えたものとなって初めて意味を持つ。一方で「構造」が問題にされ、また一方で「読み」が問題にされるのは、そうした思潮の必然の結果と言える。平安朝の物語についてはそうした思潮を背景に持った新しい解釈が研究に新たな地平を開きつつあり、それが今は定着したかに思われる。その解釈は作品を突き抜けたその奥にある発生の時点におけるアモルフ的な物語に焦点を当てたものである。古代の呪術的観念、神話的機能と構造、そういったものの返照が文学の自覚のもとにどのように異化されて物語を生んでゆくのかが問われる。作品を、表現された結果としてのテキストとして、固定した文章の上で読み解くことから一歩進んで、物語を生み出す営みの上から理解しようとするのである。「平家物語」においても同様の視点を鮮明にした研究の立場が兵藤裕己氏などによって展開されている。身に汚れを背負って追いやられ

ねばならない形をした盲目的語り手による語りに「平家物語」の本質があるとする兵藤氏の解釈は傾聴に値しよう。柳田国男氏による語り物の理解に淵源を持つその論は作品のテキスト内部と語り手の内にある語りのエネルギーを解釈する際の指標となる。それは平家の物語が「平家物語」の諸本を析出する以前の作品の本質についての視点を研究の上で回復しようとする強い主張と言えるだろう。

小林氏の研究は「平家物語」の諸本の比較を通して原態ないし古態を判定し、どの伝本を原態にもっとも近いものと認定し得るかと言うことに、研究者が一樣に目を向けていた時代に始まっている。「平家物語」を論じるにはどの伝本によるべきかがまず問われねばならない時期であった。諸本研究そして原態論は避けて通ることの出来ない目前の課題であり、かつ延慶本と四部本を原態として推定する説が盛んな状況の中で、小林氏は延慶本を対象に選ぶ。そしてまた当時、大きな魅力をもって彼等を惹き付けたのが永積安明氏の平家物語論であった。唯物史観を背景に、変動期における社会の新しい階級のエネルギーを掬い上げたところに叙事詩としての「平家物語」の成立があると説くその論は、戦後の混乱期が終わって高度成長期の真只中にあるその時代の若い研究者に強く訴えるものでもあった。永積氏の論は文学論の方向にのみならず、諸本研究の方面にも、従来の成果の一つの方向付けを与える結果となった。「平家物語」の原態が年代記に近いものであるとする考えに拍車をかけたのである。乗り越えねばならぬ

解釈の枠組み、あるいはその中で考えねばならぬ文献批判の問題がその時期には呈示されていたのである。そうした研究の状況の中で小林氏が選びとつたのは成立論に向けて作品論を展開する道であった。本書の第一章「平家物語における歴史と構造」は作品論がそのまま成立論と原態論となっている魅力的な論稿によって構成されている。それはテキスト内部の統合性とその特性を解釈する、延慶本の本格的なテキスト解釈を通しての作品論であり、また諸本研究の方法に新たな地平を開く多くの提言を生むものでもあった。

本書を成す際に書き下ろされた「序説」には、氏の研究の基本の方針が語られている。氏は、諸本研究の過程の中で比較対照の組上に乗せられ、かつ分断されてしまった「平家物語」を、作品としての全体性を回復する形で対象化しようとする。そしてそのために「平家物語」のテクスチュアを読み解く作業が必要であると考えるのである。小林氏は永積氏の作品論を文学論としての啓発性は高く評価するものの、それが余りにも論者の主体性を投影したものであって、成立論としての実体を持ち得ないという限界をそこに見る。そして永積氏の論には欠けていると考えられる作者の側の論理構造を明らかにすることが計られねばならないことを指摘する。そうした考えの上に立つ小林氏が取つたところの基本方針は、「物語を生み出した歴史的な社会的な関係、従つて作者を包込む構造の次元へと立ち戻る以外に、読みとしての有効性を得られないように思う」(P16)「『平家物語』の成立を作品論とし

て追及するための読みは、延慶本を基本に据えるべきだ」(P17)という言葉に収約されるだろう。原態論としてはその議論の振幅の狭さと一面性の故に必ずしも賛意は表しがたい。しかしながら「平家物語」研究の上では非に取り上げなければならぬ延慶本を対象に据えてそのテキスト内部の統合性を一つ一つ確認する方向を定めた点で、氏の方針と本論で示されるその具体的な考察には大きな意義を認めねばならない。この序章はそうした基本方針を明らかにするだけではなく、従前の氏の作品論を物語研究の今の状況に引き付ける形で総括する役割をも果たしている。「読み」「テキスト」「モノ」「序列化」「中心と周縁」「秩序と反秩序」「深層の構造」「始原」といった言葉を駆使する物語研究の現代のパラダイムの中で、その総括が図られる。小林氏の明晰さはそこに遺憾なく發揮されており、それによって我々は、氏のこれまでの研究が作品の上にならぬに足踏みを繰り返すものではなく、その考察が歴史を物語ることの意味の追及という奥行を持つた問題に帰着するものであることを知らされるのである。そしてまたその論述は、本論中に繰り返し指摘される、山門の護持によって国家の安泰が計られるとする山門国家観とも言うべき、延慶本作者の主張の深層の構造を鮮やかに炙り出す。ただ惜しまれるのは、第一章そして第二章において重要な論題となっている、延慶本を原態に近いものとする主張がそこでは積み残しにされている点である。小林氏の延慶本原態説の今の時点での意義についての言及が必要ではなかったか。延慶本の素材および本文研究についての

新しい進展をして四部本についての新たな取り組みが明らかにしつつある成果を議論の外においてしまったその文章は、小林氏の現在の興味の在り所を示しはするが、序章としての十全の役割を果たしているとは言えない。

さて序章では三つの観点において延慶本の作者の歴史叙述の方法の整理を行っている。いわく、一、説話による歴史叙述、二、歴史叙述の現在の意図、三、テキストの現実的機能がそれである。それら三点は第一章の諸論文を貫く小林氏の研究上の観点そのものでもある。第一の点は、延慶本の多くの説話を作品の本筋から逸脱した傍系説話として、その存在をもって延慶本を後期増補の伝本であると位置付ける考え方に対して異議を唱えるところから出発したものと思われる。そしてこの観点からなされた第二章の諸論稿における考察は、延慶本における歴史叙述が物語的な深層構造を備えたものであること、そして傍系説話とされたきた故事説話が作者の歴史についての認識の方法と叙述上の構想を担って構成的に配置されていることを明らかにしている。そうした中で小林氏は延慶本のテキストの緊密な構成に注意を促し、その強い統合性の存在の証明をもって、延慶本が「平家物語」のテキストの原態に近いものであることを主張する。「平家物語」の原態ないし母胎となったものの形についての考え方には大きく分けて二通りある。一つは、例えば柳田国男氏のようにヒジリ的な宗教者による語り物的な説話を母胎として成長したと推定する説であり、いま一つは、例えば永積氏や石母田正氏のように年代記か

らの成長と見る説である。この二つの説は作品の捉え方が、前者は物語あるいはまた口承世界のもの、後者は作品あるいはまた書かれたものをそれぞれに念頭に置いたものようであり、問題としている次元を異にしている。原態の次元の捉え方に差があると議論がうまく噛み合わなくなってしまう。小林氏の説は一見、前者に左袒し後者に対立するようにも見えるが、実はそうとも言えない。その説もまたそれら二者とは次元を異にしている。十二巻にわたる現在の基本的な内容を備えた作品としての「平家物語」の原形を原態と捉えた上での論が小林説である。その次元での原態との距離ということならば、氏が頻りに主張されている四部本の後期成立説は納得出来る。それでも小林氏の言う延慶本原態説つまり天台系の唱導家の山門国家観の主張をテキストとして具現することが現在の「平家物語」の原形を作ったとする説にはまだ疑念が残る。延慶本の原形の成立説としてならば説得性を十分に認められるのだが、「平家物語」ということならば、歴史的、社会的な、あるいは文学的な背景について、そしてテキストを織りなしている文学的諸要素それに十二巻本成立の過程についても多面的で更に突っ込んだ検討を待たねばなるまい。

第二の点は乱世の歴史を反面教師として、古代の権威を頂いた形のあるべき現在と未来の方向を見定めようとする意志が延慶本の叙述の中に働いていることを指摘するものである。その意志を支えているのは天台山門の主張する王法仏法相依の思想であり、それを表現する手立てとしての歴史には唱導家が用いる譬喩因縁

に類する役割が振り当てられている。延慶本のそうした歴史叙述の意志を思う時、その作者圏として自ずから王室寿祝の職掌を持つ山門周辺の、たとえば安居院流の唱導家が推定されると小林氏は説く。「平家物語」の作者についてのその考えは、「徒然草」の伝えを敷衍した内容となっている。そして天台の唱導家を作者圏に推定し、滅罪鎮魂の意図を成立の要件と説く点は筑土鈴寛氏の説を継承したものである。そしてまた、そうした考えを固めてゆく過程で氏の恩師である福田晃氏のその方面への積極的な発言が大きく影響を与えているだろうことも想像にかたくない。そうした背景の上に立つ小林氏のオリジナリティは、叙上の特質が延慶本の上に際立った形で現れていることをテキストの解釈を通して証明してみせた点にある。第三の点に関して氏は、平家一門の亡魂救済が同時に延慶本成立当時の乱世の救済となるとする御霊鎮魂の論理の働きを延慶本の中に読み取る。そして平家の滅亡を語るテキストを通して法華経の、あるいは懺悔による滅罪の力を乱世の救済に向けて実現させようとする機能が、延慶本に付与されていたとする解釈を導き出すのである。取り上げられている本文の中には細かな解釈の上で納得出来ないものもあるが、志向するところの意味についての氏の読みには概ね賛同し得る。それ故、私にはこれら三点をめぐる小林氏の論述が延慶本の作者圏とその制作意図についての論として説得力を持つように思われるのである。

ただし「平家物語」の原態を考えると、単純な疑問たど

えば「徒然草」以外の文献における作者についての伝承、なかなか「平家勘文録」に記す六人の作者と六種類の「平家物語」の存在についての伝え、あるいは「治承物語」や八帖本の存在を記す記事などをどのように説明するのか、そしてまた延慶本における真言宗の要素をテキストの問題としてどのように考えるのかなど、一筋縄にはいかぬことが多い。原態の意味を狭く限定することで解決を得られる面もあるけれども、限定しすぎるときわめて多元的かつ多面的なこの作品の本質が掬いきれずに終わってしまう。小林氏が序章の中で原態の問題に触れずに終わったのも、あるいはそのことを考えられたからなのかもしれない。原態の問題にひどく私が拘るのは、今の段階ではまだ原態の問題に関連付けることが出来るまでには、伝本ごとの作品論が尽くされていない。それ故、今は原態論を棚上げにした上で、屋代本、覚一本、盛衰記、長門本、四部本などの主要な諸本を比較対照表の枠から解放して、それぞれを独立した作品であるという認識のもとに、小林氏が試みた形の作品分析を行うことが必要であると考えるからである。

第二章の「平家物語」の古態」では、四部本の古態性についての議論を批判し、古態性を判定する目安として史的風土性、つまり事件当時の歴史社会との密着度、の検証の有効性を具体的な形で呈示する。そして四部本の古態性の証拠とされる事件の日付についての正確さは、史実に忠実なものにしようとする後人の加筆であり、四部本自体は当時の歴史の状況への疎さを多分に持つ

ていると小林氏は説く。四部本についての氏の説には全く同感である。具体的に取り上げられた堂衆合戦は院政末期の政治経済の上に残れた下剋上の状況を反映するもので、延慶本にその実情がいかにそれらしく表現されているという指摘も納得出来る。四部本のみならず寛一本もまた多くの箇所において、叙述が内容から疎遠になったテキストであって、その成立の新古を論じる際にも、小林氏の視点が有効に作用するように思われる。

第三章の「説話の生成と展開」では文覚を主人公とする説話を取り上げている。小林氏が文覚を取り上げようとするのは、説話そのものへの興味に惹かれてということだけではないらしい。むしろ氏が「平家物語」の基盤をなしていると考えるところの論理、つまり国家の危機的状況においての法華経的世界観に基づく滅罪救済の論理が、延慶本の文覚像の上に色濃く投影されていると考えるからなのだろう。氏は延慶本の文覚譚が俊乗房重源配下の難波の地に住む女流の念仏聖集団の唱導活動の中で生まれたものであることを説く。その点で「平家物語」の他の伝本の文覚譚がその生成の基盤から離れて物語草子的なものに変容したものであったり、別の生成の基盤の上になる説話を汲み上げたものであったりすることは性格を異にする点を明確にしようとするのである。

る。第一章、第二章はもちろん、この章の小林氏の議論もまた極めて求心的であると言つてよからう。唱導の世界をクローズアップすること、文覚譚の生成と展開について述べる議論をも、天台山門の唱導家に「平家物語」の作者圏を求めたための布石としているのである。もっとも、この章に収められた文覚譚をめぐる三つの論稿が説話文学の研究の方面から見ても興味ある指摘を含んでいることを付記しておかねばなるまい。

始めに言及した兵藤氏のように、テキストを突き抜けたその奥にある語りの本質とエネルギーについての広い問題の土俵の上に「平家物語」を据えて考えることが一方で要求される。そしてまた一方では小林氏が本書で展開しているような、伝本を限って作品としてのテキスト分析を行う研究がますます盛んになることだろう。いわば、ことの両極に当たるようなこれら二様の研究を通して「平家物語」が文学としての全体像を回復することが出来るのではないだろうか。そのことを計る過程の中で「平家物語」の現代における古典としての意味もまた自ずから明らかになるに違いない。

— 南山大学教授 —

(一九八六年五月発行 三弥井書店刊 三三六頁 六八〇〇円)

(みのべ・しげかつ 南山大学教授)